

沖縄歴史の散歩道

石碑を巡る①

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



玉御殿の碑文

沖縄の各地には、琉球王国時代の石碑が点在しているのはご存じでしょうか。首里を中心として200以上の石碑があり、さまざまなタイプのものが確認されています。石碑は国家や人物の功績を顕彰したものや建築物の竣工記念碑、名所などを示すものや墓碑、宗教的な意味合いの碑などがあり、大半の石碑は加工しやすい細粒砂岩（ニービヌフニ）でできています。

古琉球の時代には首里王府がさかんに国家的な事績を記した石碑を建立しました。確認できる一番古いものは「安国山樹華木碑」（1427年）で、王府ナンバー2だった懐機という人物が中国で造園技術などを学び、首里城のほとりに人工池の「龍潭」と「安国



日輪双鳳雲文

1522年、首里城から那覇港南岸までをつなぐ真珠道の竣工記念碑である「真珠湊碑文」をみると、文章は漢字交じりのひらがなで書かれています。多くの人はこの石碑を見て日本文化と同じだと感じることでしよう。しかし実はそうではありません。当時の日本には国家や個人の業績を顕彰するために石碑を建てるという習慣がありません。板碑などの宗教的な目的にほぼ限定されています。

山」という築山を完成させたことが記されています。15〜16世紀頃の石碑の特徴には共通したデザインが採用されています。石碑の上部には中央に日輪、左右に鳳凰と瑞雲（めでたい雲）などが刻まれています。これは王権を表すシンボルです。玉陵にある「玉御殿の碑文」（1501年）や「円覚寺禪寺記」（1497年）などがあげられます。



真珠湊碑文

上里 隆史

(うへざと・たかし)



琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ポニー・インク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。

トでのみ使用されるもの。王府の公用文としてひらがなを使用するのは琉球にしか見られないものです。つまり古琉球の石碑は中国や東南アジアの文化でありながら、文章に日本では公用文として使われない、ひらがなを用いるという琉球独自の様式なのです。

石碑の文化は中国や東南アジアに見られるもので、琉球もこの影響を受けています。また当時の日本における公用文は和様漢文という日本風にアレンジされた漢文で、ひらがなはプライベ